

お帰りなさい お兄様  
鉄の帳のシベリアで

骨を凍らし身を晒し

御苦労なされた 幾年を

想えば想えば 唯泣ける

拡声器から流れる「涙の再会」の歌に、日の丸の小旗を振りながら「お帰りなさい、ご苦労様でしたー」と婦人会の方たちの出迎えに感激しつづつ上陸した。

引揚援護局の大広間でしばらく休憩、久しぶりで横になって見る曇の感触。静かに目を閉じると、あの昭和二十年八月十五日のソ連軍との大激戦から今日までのいろんな出来事が走馬灯のごとく脳裏を駆け巡り、不運にも帰国できずに重労働を課せられている幾多の同胞のことが思いやられ、一日も早い帰国を祈ったのでした。一日も早い帰国を祈りました。

## 現役志願した一少年

山形県 阿部 正二

(旧姓 渋谷)

生い立ち、家族、郷土の環境

私は大正十二（一九二三）年三月一日早朝、西村山郡大井沢村で一農民の三男として誕生しました。入隊時の我が家は、田地一町歩、畑地一町歩を耕作して米、野菜の生産を行い、また春、夏、秋の三回、繭の生産（桑の葉は自家生産）、冬期は国有林の下刈り、枝払い、さらに木炭業を家族全員で分担して生計を立てておりました。

入隊当時の家族は、次男は昭和十六（一九四一）年、盛岡の騎兵隊に入隊して満州へ転属、長男は昭和十八年四月三日召集で山形歩兵連隊に入隊しており、それに両親、長男、弟と私の五人家族でした。

この郷土は、米、各種野菜、林檎等の果樹、さ

らに繭の生産で生計を立てている山村です。交通は不便で、山形駅で左沢線に乗り換え、終点の左沢駅で下車、さらに山形交通バスで終点柳川停留所で下車、ここから大井沢峠を越えての十キロの徒歩です。また三山線を利用して、山形駅→高松駅→関沢駅で下車、山形交通バスで月山停留所から六キロの徒歩で、現在も変わりありません。

#### 学歴

昭和十一年三月、大井沢村立尋常高等小学校卒業、昭和十七年三月大井沢村立青年学校本科卒業。

#### 入隊前の職歴

小学校卒業と同時に家業である農業に従事。昭和十五年三月、大沢村信用販売購買利用組合の事務職として採用されました。昭和十六年三月、家業の農作業が手不足になり、この手伝いのため退職しました。

#### 現役志願

父は平和時の軍人でしたので外地勤務は無く、現役除隊し、また召集もありませんでしたが子供

のころよく軍隊生活について聞かされました。その内容は理由の分からぬ私的制裁のことでした。

拳を握っての往復ビンタの真似、ベッドの下に潜っての「鶯の谷渡り（ベッドはないので座机の下で）」柱へ昇っての蟬の鳴くまね、満水のバケツを両手に持って不動の姿勢等、自分で実際まねして家族を笑わせていました。

そしてその後、このような私的制裁で涙を流した夜が多くあったが、自分たちはこのような制裁を受ける何ら理由は考えられないのになぜだろう。軍隊特有の先輩からの申し送りだろうか、それとも自分たちが受けた仕返しだろうかと思う。その反面、しかし全く理由のないはずがない。初年兵同士で欠点探しをしたが見出せない。ちよつとしたことでも話せば分かるのに、言葉が体罰に転化したものと考え、二年兵になるまで我慢また我慢で耐える気になり、決して先輩を恨んだり、また変な顔つきもしなかったと聞かされ、お前らも大きくなって軍隊に入ったら必ずあることだから参

考までに話しておくという父の言葉でした。

軍隊は軍事訓練はもちろん、掃除、洗濯、裁縫、炊事等の家事、訓話、それに先の私的制裁を含め、家庭科、体育科等のある心身訓練学校でした。この学校を卒業した俺を、自分で褒める訳ではないが、我慢強く、身体強健、世間的に敵なく、また軍隊に行く前には全然出来なかった家事も母さんを手伝えるようになったと。

また、父の弟で、工科学校一期生でマニラ、スマトラで山下部隊長の副官の渋谷少佐（後述）の便りの内容、それに一年前に現役志願した同級生からの軍隊生活の詳細な便り等に強く刺激され、母に相談しましたがなかなか首を縦に振ってもらえなかった。しかし、毎日の私の願いに負け、とうとう現役志願を了解していただきました。

徴兵検査は見事に甲種合格と検査官に言われ、笑顔で「甲種合格」と復唱しました。さらに検査官から「希望兵科は」といわれたので「戦車兵です」「第二希望は」との問いに「第二希望も

戦車兵です」と答えますと検査官は「ヨシ、分かった。去ってよい」と言われ、一目散で我が家に帰りました。結果を待っていた家族に報告し、祝福されました。

入隊（第一次盛岡部隊での軍歴）

「盛岡北部第四十五部隊へ四月十日入隊せよ」との通知があり、親戚、部落の皆様や各種団体等に挨拶回りをし、身の整理等で忙しい毎日を送りました。

昭和十六年四月九日、入隊祝に来られた多くの親戚、友人、村人から激励の言葉をいただき、午前七時半、自宅を出発しました。途中、中上集落の吊橋前には村長さんをはじめ青年団、女子青年団、国防婦人会、ほかに多くの村人が見送りに来ておられ、激励の言葉と「万歳！万歳！」の歓呼の声に送られ、私は感謝、感激の涙がしばらく止りませんでした。新たに郷土の皆様のにそむくことなく、また傷付けることなく国民のため尽くしてきますと心に誓いました。

郷土は交通不便で、長い距離を徒歩でバス停留所に着いたときは汗だくでした。バスと汽車を乗り継いで、役場からの通知書にあった「四月九日夕刻までに山形駅近くの後藤屋旅館」に集合しました。そして北部第四十五部隊より出迎える曹長の指揮に入りました。

曹長からは「今晚はここに泊り、明日早朝盛岡へ向かうから、割り当ての部屋でゆっくり休むよう」言われました。翌朝、山形駅出発、午後初めて見る盛岡駅に到着、北上川に沿って徒歩で部隊に向かいました。

新しく建設された兵舎に案内され、各中隊ごとに分かれ、さらに戦車班と自動車班に分けられ、各班長の紹介があつてそれぞれ内務班に分れました。早速、入隊手続きと身体検査を終えると、先輩たちが新しい二等兵の襟章の付いた軍服を運んできて、身長に合った服を渡され、先輩の指揮により軍人としての一步を踏みました。

先輩たちが準備した夕食の席に着き、初めての

軍隊食を味わいました。食事しながら班長から班付き下士官、先輩全員の紹介、それに初年兵一人一人に指導担当として先輩一人が割り当てられ、右隣に就寝するようにいわれました。私の担当は一年先輩の千葉上等兵で、とても親切に指導、援助してくれ、幸せでした。夜の点呼が終り、軍隊初のベットに潜り込みましたが、ベッドが堅く、なかなか眠れませんでした。

翌日、銃、銃剣等の兵器類及び軍服以外の被服類が渡され、引き続いて兵器の手入れ方法、被服の整理整頓、特に積み重ねる順序には、非常の時にも暗闇で手探りで着用でき、手間が取れないから厳守するよう説明がありました。

更に被服の補修についても講習があり、襟布の縫い付け、ボタンの取り付け、靴下の補修（靴下の破れはほとんど足の踵であるから、下手に補修すると行軍の際擦れをおこすから丁寧）を教わるなど初めてのことで、手に針を刺す者もいて笑いのとまらない講習会でした。

また、軍事以外の初年兵の日課が示され、一週間交替の当番制で班付き上等兵が指名するから協力するよういわれました。

食事の準備

- 一 飯上げは炊事場より運搬
- 二 下士官室には決められたお膳を届ける、食事が終わったところを見計らって下膳する
- 三 内務班はテーブルに全員分盛り付ける。全員食事終ったら食器洗い
- 四 食缶返納、食事終ったら洗って炊事場へ返納

兵舎の清掃、食事当番以外の当番

内務班、下士官室、洗面所、トイレ、浴場  
各自毎日実施する事項

- 一 個人に貸与されている兵器の手入れ
- 二 襟、靴下の取り替え洗濯、編上靴及び営内靴の手入れ

以上の事は下士官の物も皆で手分けして行い、決して下士官に行わせてはならない

各自必要に応じて行う事項

枕カバー、敷布、下着類取替え洗濯、下士官下着類を毎日取替える方が多いので、常に下士官室に出入りして皆で手分けして洗濯すること

以上、細かな説明があった。

三日目の午前に中隊長から軍人の使命等について訓話があり、午後、戦車の構造、運転上の注意、模擬車での運転心得等の講義があった。四日目から模擬車の運転練習が始まり、二週間過ぎから広大な練習場で本物の戦車に乗り運転席に座ったが全然外が見えない。教官に話したら怒鳴りながら運転席の窓を開けてくれた。後で同年兵に聞いたら皆同じでした。

毎日休みなしの練習で、教官の指示通り速度の調整、方向転換等が出来るようになり、教官から褒められたとき、嬉しさの余り万歳と叫び教官に笑われる。

九月末一期の検閲無事終了。その後下士官候補

受験、北部第四十五部隊で十二人が合格、その中の一人に私も含まれる。

十月一日、下士官候補試験合格者十二人は一等兵に昇進、渡された二つ星の襟章を早速上衣の襟に縫い付ける。同時に特別教育の受験命令があり、翌日より戦車の構造等の学科並びに運転技術の指導を受ける。

#### 戦車学校入学

昭和十八年二月一日、奉天省四平街の戦車学校へ入学のため住み慣れた盛岡を出発、下関出航、釜山上陸、朝鮮半島を縦断、鮮満国境を通過して四平街に到着する。到着と同時に満州第五八三部隊四平街戦車学校への入学手続きを行い、結果無事入校を許可される。

同校は将校養成学校と我々下士官を養成する学校の二つの校舎があり、区隊ごとに一区から十区までの十区隊編成で、一区隊は約四十人で、生徒は内外の戦車隊出身者でした。入校に当たっての学

た。

翌日、各区隊ごとに中戦車一台、軽戦車一台が配置され、教官よりそれぞれ担当者の指名がありました。

中戦車 正運転手 福岡部隊 楨原

副運転手 同 堀

軽戦車 正運転手 盛岡部隊 渋谷(私)

副運転手 公主嶺部隊 小田

満州は十二月に入ると毎日氷点下で、午前八時からの演習に支障をきたさないよう事前に整備点検の上エンジンを始動し、暖めておかなければならず、他の者より早く車庫へ行きます。車庫まで約二百メートル、今まで数度にわたり狼が現われており、絶対に単独行動はとらないように注意があり、四人そろって防寒外套、防寒帽、防寒靴、防寒手袋などを完全に着用して車庫に向かう毎日でした。

演習開始の時間間近になると、教官助手に引率された生徒が、少し遅れて教官が見えて演習開始

となります。そして異状なく動く戦車を見てホッとする毎日でした。演習終了後は、明日の演習に備えて計器類、燃料、足回り等総点検して日報を作製、教官に提出します。

昭和十九年二月ごろ、内地では米B29爆撃機による爆撃を受け、各地で被害甚大のニュースを耳にするようになりました。教官からは大東亜戦争は日増しに激化し、皆の卒業が早まるかもしれないから心の準備をしておくように伝えられました。かくして昭和十九年四月二十日、戦車学校を卒業、満州第五八三部隊長兼学校長である陸軍少将名倉葉閣下より、下士官候補課程の卒業証書を頂戴し感無量でした。

翌二十一日、盛岡部隊への復帰準備のため休養となり、二十二日、関釜海峡の治安悪化のため、教官が下関まで引率することになりました。そして入学時に盛岡、習志野、福岡と七日間の旅の逆コースをたどったのですが、下関まで引率された教官とは無事下関上陸を喜び握手して別れました。

## 第二次盛岡部隊での軍歴

盛岡部隊では元の中隊に配属され、懐かしい内務班に落ち着きました。内務班には同年兵、初めて会う新兵、召集兵、それに先輩がおり、喜んで迎えてくれました。

五月一日付けで陸軍兵長に進級すると同時に召集兵の教育係助手を命ぜられましたので、私なりの内務班教育をすることにし、同年兵にも協力をお願いしました。それは私的制裁のことです。このことについては入隊前に父からよく聞かされたことで、前述のとおりですが、父の言葉通り、否それ以上の制裁を、盛岡、満州での初年兵当時に受けました。しかし私は痛さ辛さに耐えるよう努力しました。

軍隊は戦争に勝つために教育する言わば軍人養成学校であるのになぜ、殴る蹴るをしなければならぬのか。私はじめ皆同じ意見だと思いましたが、このことを先輩にもお願いしたところ、先輩曰く「私的制裁は日本軍人の明治時代からの申

し送りだ、弛んでいる者には幾ら言葉で言っても駄目だ。お前は今直ぐ任官する。もしフニャフニャした軟弱な兵隊にしたら、必ず日本が負ける。生意気なこといな」と怒鳴り声が返ってきました。

これに対して私は「世代が違います、今の人間は話せば分かります。どうか私に任せて下さい。もし先輩が心配されるような気配が見えたら考え直しますから」と懇々とお願いしますと、「この馬鹿者、好きなようにやれ」と言い去りました。このことは班長の了解も得ると共に、逆に激励の言葉をいただきました。

次の日、夜の点呼が終っても初年兵と召集兵がベットに入ろうとしない。床についても毎晩恒例の「起床!」と怒鳴る声に起床させられ、説教と同時にビンタ等の私的制裁を予期してのことだろうと思いました。そこで「今晚からは点呼が終つて、班長からの伝達等が無い限り、直ぐベットに潜り込むように」と話したら皆妙な顔して就寝し

ました。翌日からの点呼では、今まで縮みこんで整列していた彼らは伸び伸びとし、しかも笑顔がみられ安心しました。

召集兵の一期の検閲も無事終わり、やれやれと思っていた矢先、部隊の編成替えとなりました。

昭和十九年十月二十日、部隊は達第一二六一四部隊となり、中隊は分散され、北海道帯広に移駐する命令が出ました。移駐して驚いたことは戦車の台数不足でした。それでも大型重機関銃が二台、それに大型砲を備えた大型戦車が配備されましたので気安めにはなりました。

ここで無線通信と手旗信号の教育を受け、昭和二十年二月十日伍長に任命され、二月二十日より三月十九日までの一カ月間、帯広駅から四つ上った根室駅付近の山林で雑木を伐採して炭焼き作業に従事しました。

編成は、私が班長で衛生兵一人、隊員十二人、計十四人で、各中隊一カ月交替で、私の班は最初でした。宿舎はテント張り、風呂はドラム缶の五



右衛門風呂という原始的な生活でしたが、全員心を一つにしての大量生産を上げ、それが部隊副官に認められて隊員全員が精勤賞を授与されました。これは隊員の喜びと共に私の名誉でもありました。しかし我々軍人がなぜ木炭を生産しなければならなかったか、生産した木炭はどこへ運び、何に使用したかいまだに分かりません。

#### 千葉県陸軍戦車学校入学

昭和二十年三月二十一日、千葉県陸軍戦車学校入学を命ぜられ、四月一日入学しました。学生は、中尉、少尉、見習士官、軍曹、伍長の上官が多く、中には盛岡部隊の戦友や少年通信学校卒業生が三割ほどいましたので、心強く思いました。入学に当たっての学校長の訓示は「軍人として階級はあるが、本校では生徒に階級は無く、小学校の一年生同様に教育するので諸君も互いに同資格で付き合おう」と言われました。

続いて少佐の教官から「明日から学校の方針に基づいて講義し、貼付してある名前では呼ばず机の

番号札の番号で呼ぶ。諸君も質問するときは番号を言って質問するように。出来れば胸に番号札を付け、お互い番号で呼び合ったらどうか」と皆を笑わせる。

教育内容は無線で、モールの暗唱、電鍵の打ち方、正しい暗号の解読でした。モールス暗唱のイ（・―）は「伊藤」、ロ（―・―）は「路上歩行」、ハ（―・・・）は「ハーモニカ」と唱える声が講堂いっぱいに広がりました。三カ月半も過ぎた七月中旬ごろ、三班に分けられ、卒業試験に備えて、それぞれ各地区に分散して交信、特に暗号解読に力をいれられました。すべて初めてのことなので不安でしたが、努力が実って帰隊してからの教育に自信ができました。

七月三十日卒業証書が授与され、同時に達第二一六四部隊に配属を命ぜられました。そして八月一日、達第二一六四部隊に入隊しました。

翌日、部隊長及び中隊長に千葉県陸軍戦車学校通信科卒業の報告をしました。中隊長より兵舎内で

の一週間の休養を与えられ、学校で教わったノートの整理復習、身の整理をしました。

#### 終戦

八月十五日から残務整理に当り、十月二十五日、部隊長より達第二一六四部隊の兵役免除の達しがあり、復員の準備をしました。

復員は十月二十七日、支給された衣服、食糧、日用品等を、おそらく二度と来ることが無いと思われる部隊を去りました。そして皆さんとも互いにご多幸を折り合い、握手を交わしそれぞれの故郷へと分されました。

翌十月二十八日、四年半ぶりの我が家の敷居を感無量でまたぎました。当時、我が家には電話が無かったので、役場を通じて帰宅時間等が連絡しており、両親は着替えなどを準備して待っていてくれました。夕食には近親者と共にささやかな祝賀会が開かれました。当時満州に入隊した次男、シベリア抑留中の長男は復員しておらず、家族は両親、弟、姉の四人で細々と農業を営んでおりま

した。

そして昭和二十一年九月、次男が満州から復員、さらに二十二年六月、長男がシベリアから復員しました。当時は兄弟が多い家庭が多かったので、一家から二人、三人の現役または召集で軍務に服している家庭が普通でしたが、全員無事で復員した家庭は少なく、全員無事復員した我が家は村民かうらやましがられました。

前述の父の弟の洪谷少佐は一旦復員しましたが、マニラ、スマトラ駐屯時に米軍との交戦指揮者としてA級戦犯に扱われ、巢鴨収容所に入所しておりました。我々日本軍は米軍と戦争しているのであって住民とは関係ない、むしろ食糧、日用品、建造物等は直接、間接に住民のお世話になっているから感謝の気持ちで接し、街で会ったら笑顔で挨拶するよう部下に命じ、部下はこのことを誠実に守って地域住民から絶大の信頼を得ていたというのです。

洪谷少佐が巢鴨収容所に収容されたことを知っ

たマニラ、スマトラの住民はこぞってGHQに以上の理由を上げて無罪釈放の嘆願書を提出しました。その結果GHQはこれを認め、即時釈放され、無事帰宅しました。

私は昭和二十二年十月六日、阿部家に婿養子になり、大工の見習修業をして二級建築士、一級技能士、職業訓練指導員の資格を取得して工務店を開業しましたが年齢には勝てず閉店し、現在は夫婦二人で僅かばかりの畑地で野菜を栽培、余生を楽しんでおります。

子供は女三人で、上の二人は東京大学で事務職、下の一人は山形市で美容院を開いております。最後に、戦地で敵弾、内地では爆弾で倒れた方々に哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り致します。

我々戦争経験者は生ある内に戦争の悲惨さを詳細に例をあげて後世に伝える義務があります、でないといつか風化したり、正しくない歴史が伝えられる恐れがあります。

## 満州、そして内地の防衛

山形県 高山 義夫

(旧姓 荒川)

大正八(一九一九)年十月、父作治、母ツタエを両親として、戸沢村名高で生まれました。そのころの家族は、祖父、兄夫婦に兄の子供たちと、私の弟を加え九人家族で、父をはじめ一家は大工が家業でした。

戸沢村の尋常高等小学校の高等科二年を昭和八(一九三三)年三月に卒業し、大工などの見習いをしていくうちの昭和十四年十二月一日、徴兵検査を受け、甲種合格でした。

昭和十五年二月一日、第二十四師団の山形の歩兵第三十二連隊要員のため現役兵として歩兵第二十七連隊留守隊第六中隊に入隊しました。入営のときは、村の青年団員一同、多くの村民のかたがたの見送りを受けました。同じ村からの入隊者は